

---

# 人間関係

入川出水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人間関係

### 【Zコード】

N1769T

### 【作者名】

入川出水

### 【あらすじ】

僕は旧友の澤と再会した。しかしあいつは馬鹿だった。

(前書き)

シニアードシアター第1弾。

僕が久々に地元に帰ってきたという内容を高校時代のある友人に連絡したところ、彼もちょうど帰省していたことが分かつた。これ幸いとばかりに僕達は都合をつけて落ち合い、久闊を叙した。きゆかくじよたわいもない話をあれこれ交わしては、何とこのことのない冗談で笑い合つた。

あいつがあの話を切り出すまでは。

\*

ほどよく酔いも回つて、腹もいっぱいになつた頃。

旧友、N澤は下品に笑いながら、僕の肩をつついた。

「お前、今度結婚するんだってな。相手はどんなんだ、美人か？」

「まあまあかな」

ひゅう、と口笛を吹くN澤。

「羨ましいねえ。俺のカミさんと取つ替えて欲しいくらいだ」

「うーん、でもどうしてか結婚式には昔の友達は絶対に呼びたくないって言つてたけどね」

「昔の友達ねえ……」するとN澤は思いついたように、「覚えてるか？ ほら、三年のクラスにさ、A子って女子いたじやん。結構可愛かった口でさ」と顔を突き出した。

「ああ、いたね」と僕。

「実は俺、あの頃A子のことがずっと好きだったんだよ。おつと、カミさんには内緒だぜ？ でもなあ、俺ってブサイクだから、もち

ろん告白とかできるわけなくてさ。ただ遠巻きに眺めているしかなかつた。……だが！ そんな俺にもある日、チャンスが訪れた

「チャンス？」と僕はその話に食いついた。

「ああ、チャンスだ。あれだ、こじらの地域が連日ものすごい大雨に見舞われて、洪水警報が出されたことがあつたろう？」

「あつたつけ」と僕は首を傾げた。

「あつたんだよ。でも、その雨の降り始めの日のことなんだけどさ。俺が部活帰りに下駄箱で靴を履き替えてたら、A子が玄関で立ち尽くしてたの、困り顔で。そのとき俺はピーンー！ ときたわけよ。もしかしてアイツ傘持つてないんじゃないかなってな。孤独に雨止みを待つてているA子の横顔に、当時の俺は柄にもなく興奮してた」「いや、十分に柄だよ。すごく気持ち悪いよ」

「そして俺はもう一つピーンー！ ときた」

乙澤は自慢げに人差し指を立てた。

「今度は何だい？」

「なんと俺はその時、傘を一つ持っていたんだ。一つは教室の傘立てにあつたのをパクってきたやつで、もう一つは気の利くお袋がその朝俺に持たせてくれた折り畳み傘だった。これはもう彼女に貸すしかない。そのときになつて初めて折り畳み傘の存在に気付いた俺は、これを天の恵みだと思つた」

「というよりただの間抜けな」

「当時A子ちゃんラブだった俺は当然ながら彼女に傘を差し出そうとするわけだ。どっちの傘にしようかちょっと迷つたけど、折り畳み傘だと彼女に気を遣わせるかと考えて、結局、パクってきた手持ち傘の方を渡したんだ」

「元の場所に返せよ！ お前最低だよ！」

「A子は不審そうな顔をしていたが、構わず俺は言つてやつた。『俺は濡れても平氣だから、それはA子ちゃんが使つてよ』ってな。ただし、そこで俺はあえてもう一本の傘の存在を明かさなかつた。なぜかつて？ その方がカッコイイからさ」「

「……へえ、それから？」

僕はもう聞き飽きていた。

「俺は颯爽わきやうと嵐の中に飛び出た。無論、クールに片手で挨拶するのも忘れずにな。そして、大方A子の視界から消えたであろう辺りまでやつて来ると、折り畳み傘を取り出した」

「なんだよ。結局、自分は濡れずに好きな子に良いところを見せられたつていう自慢話かよ」

僕は焼き餅を焼いたふりをしたが、N澤は残念そうに首を振った。「それで終わりなら幸せだつたんだけどな。この話にはまだ続きがある」

「続き？」と僕は相槌あいづちを打つた。

「してやつたり、とほくそ笑んでいた俺は気づいてしまつた。なんと取り出したのは折り畳み傘ではなくただの筆入れだつた。つまり、今朝にお袋が持たせてくれたのは傘なんかじゃなく俺がいつも使つている布製の細長いペンケースだつたんだ。急いでいた俺はそんな単純な違いにも気がつかず、勝手に傘だと思い込んでヒーロー気取りでいたとんでも馬鹿野郎だつたのさ」

「人様の物を盗んだ報いだな」

「まだ続きがある」とN澤は顔をしかめた。

僕も呆れ半分に促した。

「例のパクつた傘、あれ、実はA子のだつたんだ」

「うわつ！ まじかよ！」

「ああ、俺も信じられなかつたよ。……翌朝。やっぱりその日も雨が降つて、俺は登校中に差してきただの折り畳み傘。……いや、今度は間違ひなく傘だつたからな？ それを玄関前で仕舞つていた。すると突然、横合いから水飛沫みずしづきが飛んできただ。何度も、何度も。びっくりしてそつちを見やると、件のA子がすげえ形相きょうそうで俺を睨んでいた

「何か言つてた？」

「『『ごめん、見えなかつた』だつてさ。あ、ちなみに、すげえ形

相つてのは怖いくらいに完璧な笑顔の」となんだけどや

「そりやおつかないな」

「IJの出来事をきっかけに、俺はA子に話しかけることも近づくこともできなくなつた。A子が取り巻き達に事の顛末をバラしかまつたんだ。そんなわけで、あれから俺はA子にまともに会わせてもらえない状態さ……」

「意外だ。A子ってもひとつおしとやかな子だと思つていたよ」「そりや大きな間違いだぜ。あこつぱほひどこ女。次会つた時にやあ何とかして復讐してやりてえよ」

「本当に?」

「……」めぐ、今のウソ。やつぱり仲良くなつて楽しくお話ししたいです

なんとも正直な男だった。

しばし間が空いて。

「じいれど、とZ澤は前置きした。

「お前も何か面白い話はないのか?」

「つーん

僕はIJをじらか<sup>よそじよ</sup>逡巡するふつをして、しかしあいつぱつ<sup>あいつぱつ</sup>言ふわけがないと思つた。

まさか、

「実は今度の僕の結婚相手がそのA子なんだよね!」

とは切り出せないし、ましてや、

「つこでに絶対に呼びたくない昔の友達つてのがZ澤のことであつた!」

だなんて、口が裂けても言えるはずがなかつたから、僕は途方に暮れて、ぐびっと酒を呷<sup>あお</sup>り、天井を仰<sup>あお</sup>ぎ見て、しみじみと考えている。

人間関係というのは実に面倒であるが、これほど面白いものも他にはない、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1769t/>

---

人間関係

2011年7月12日03時13分発行